

## コンクリート工学年次大会 2005（名古屋）の概況

実行委員会委員長 谷川 恭雄

名古屋で JCI 年次大会が開催されるのは、1986 年、1997 年に次いで 3 回目である。1986 年の大会ではコンクリートフェア（現テクノプラザ）を初めて企画・実行し、1997 年の大会では「文化を創るコンクリート」のキャッチコピーの基に、「第 1 回コンクリートアートミュージアム」を開催し、好評を博した。今回の名古屋大会は、前回のテーマを引き継ぐかたちで、キャッチコピーを「文化を創るコンクリート II」とし、特別行事として「第 2 回コンクリートアートミュージアム」を開催することにした。

愛知万博開催期間中であり、中部国際空港も開港したばかりであるため、特別講演会や見学会は、これらを中心として企画された。以下、各行事の概況を順に追って紹介する。

「開会式」では、実行委員長による開会宣言と大会参加者に対する歓迎の辞に引き続き、長瀧重義会長の挨拶と小谷俊介副会長の JCI 活動報告があった。

また、コンクリートテクノプラザの会場では、平澤征夫部会長を中心としてオープニングセレモニーが行われた。

本大会のメイン行事である「第 27 回コンクリート工学講演会」は、9 会場で 3 日間にわたって実施され、590 編の論文・報告が発表された。

「コンクリートテクノプラザ 2005」には、79 グループ、94 小間の参加があり、最先端の技術が展示された。また、これと隣接した会場で行われた技術紹介セッションでは、3 日間で 52 社の最新技術が紹介された。

「第 2 回コンクリートアートミュージアム」では、予備審査を通過した立体部門 28 作品、写真部門 36 作品、アイデア部門 10 作品が展示され、一般客を含む多数の来場者があり、関心の高さがうかがえた。

初日の午後には、「リサーチプラザ」において、JCI 賞受賞業績および JCI 研究委員会活動内容を紹介するパネルディスカッションが行われた。その直後に開催された「第 12 回生コンセミナー」では、「信頼されるレディーミクストコンクリートを目指して」をテーマとして、時間を延長して活発な議論が展開された。

「見学会」は、中部国際空港を中心とする 2 コースと名古屋の街並み見学を中心とする 1 コースが用意されたが、万博開催中のためか、参加者はそれほど多くはなかった。

大会 2 日目の午後には開催された「特別講演会」では、中部国際空港（株）参与の鳥居泰男氏による「中部国際空港セントレアの開港を終えて」と、愛・地球博チーフプロデューサーの原田鎮郎氏による「時間建築としての万博」の講演があり、1000 名を超える参加者があった。なお、特別講演に先立ち、コンクリートアートミュージアムの審査員である長瀧重義会長および土木写真家・西山芳一氏より、それぞれ立体部門および写真部門の選考経過の説明があり、内田裕市特別行事部会長より入賞者が発表された。

2 日目の夕刻には、「懇親会」が行われ、300 名を超える参加者のもと、九代目玉屋庄兵衛氏による「からくり」が実演された。

「閉会式」では、実行委員長による謝辞に引き続いて、六郷恵哲年次論文査読委員長による発表論文の概況と次年度に向けての課題の説明があった。その後、畑中重光講演部会

長から 68 名の年次論文奨励賞授与者の発表があり、実行委員長から受賞者に賞状と記念品（七宝焼きの小箱）が授与された。また、アートミュージアムのアイデア部門入賞者の発表があった。

「次期大会への引継ぎ式」では、長瀧重義会長より林静雄次期大会（新潟）実行委員長に委嘱状が手渡された後、林次期実行委員長より新潟大会への招待の挨拶があった。

大会開催の約 2 年前に、キャッチコピー、特別行事、各部長などが決定された。その後、70 名を超える実行委員の長期間にわたる強力な支援により、名古屋大会を無事終了することができた。

愛知万博開催期間中の年次大会であったため、ホテルが手配できず、参加を断念したとの声も一部で聞かれたが、テクノプラザへの延べ入場者数は約 1 万 5 千名に達した。

重要文化財や登録文化財に指定されるコンクリート系構造物の数は、年々増加の一途を辿っている。耐久性劣化というマイナスイメージを脱却して、コンクリートが文化を支える恒久的な材料として更に進化することを期待したい。

最後に、本大会の企画・運営に絶大なご尽力をいただきました梅原秀哲総務部会長はじめ実行委員の皆様、種々ご支援をいただきました長瀧重義会長はじめ JCI 役員および本部事務局員の皆様、テクノプラザやアートミュージアムに出展・出品していただきました皆様など、本大会にご協力いただきましたすべての皆様に感謝の意を表します。